

旧名古屋城下町遺構発掘調査  
概要報告書 (VI)

(名古屋市中区大須一丁目・旧紫川遺跡第Ⅴ次調査)

1987

名古屋市教育委員会

## 1. はじめに

本遺跡は、昭和57年に若宮大通地内の洞道建設工事によって江戸時代の「紫川」護岸遺構が発見されて以来、都市高速道路工事などに伴う発掘調査が続けられてきた。また、北側に隣接する豎三蔵通遺跡でも、ビル建設工事などに伴う発掘調査件数が増え、本遺跡との関連も次第に明らかになってきている。

今回の調査は、昭和57年と同58年に調査を実施した洞道部が西方へ延長されるため、シールド工法の開口部の約170㎡で実施された。この工事計画は、昭和59年の4月に中部電力株式会社より昭和61年度で施工したい旨が文化課にあり、事前の発掘調査の方法などについての調整を続けた。当初、調査時期を昭和61年の秋頃を予定していたところ、同社より可能な限り早い時期に実施してほしい旨があり、急速同年5月に、土量算定のため試掘を実施した後、同年6月に同社との受託契約を締結した。一方、発掘調査を担当する名古屋市見晴台考古資料館では、他遺跡調査の進行が遅れた等の理由から、本遺跡調査を受託できない状態にあった。そのため、文化課が、諸氏の協力を得て、同年6月30日から7月16日の間で発掘調査を実施した。

## 2. 周辺遺跡などの調査概要

「紫川に身を投げて、身は身で沈む、小袖は小袖で浮いていく、綿帽子山の白きつね、せったは山のしやあらじやあら——」と、明治の頃まで、名古屋で子どもの手まり歌として歌われたという。紫川の由来は、この歌のように源氏物語を愛読する少女が光源氏への恋病いの果て狂女となって身を投げた川から、紫式部にちなみ名付けられたとも、名古屋村のはずれの前まへにある川から、村前川とも、言われている。

さて、これまでの調査を通じて、絵図等から推定された「紫川」の存在が実証されたわけである。第Ⅰ次調査（1983年）で、縄文時代から中世及び近世に至る多量の遺物と共に、近世期の「紫川」の護岸にあたりと想定された石積遺構が、約20mの長さにあたって検出されている。第Ⅱ次調査（1983年）でも、縄文・弥生時代の包含層がわずかであったことを除けば、ほぼ同様の内容であった。また、愛知県陶磁資料館等で実施された調査箇所では、近世期の井戸状遺構や舟着場と推測される石積遺構も検

出されている。第Ⅲ次調査(1984年)で、石積遺構と土壇状遺構が、第Ⅳ次調査(1985年)では、石積遺構と建物の礎石が検出された。こうした遺構や諸々の日常生活具が多数発見され、「兼川」の往時を偲ぶことができる。一方、出土遺物の中、縄文時代早期から晩期、弥生時代後期から古墳時代、古代から中世のものも、数量・種類ともに豊富にあるが、その時代の遺構はほとんど明らかになっていない。縄文時代を別にして、周辺の台地上の遺跡で生活が営まれ、小谷地形に在る本遺跡へ遺物が流入したと想定すべきとも思われる。

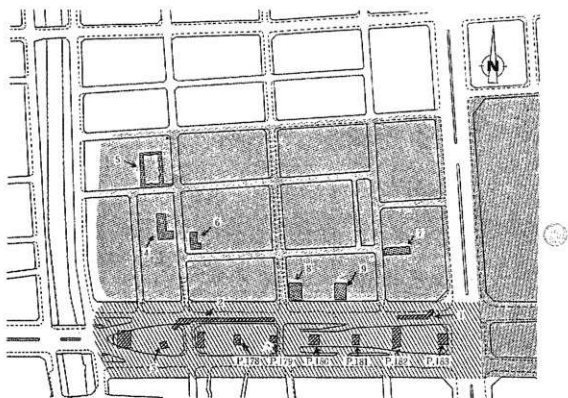
本遺跡の北側に隣接して、豎三蔵通遺跡がある。第Ⅰ次調査(1983年)で、古墳時代から奈良時代の住居跡が7軒、鎌倉時代の住居跡が1軒と、近世以降の城砦跡と想定される濠や建物の礎石群などが検出されている。第Ⅱ次調査(1983年)でも、濠が検出され、平安時代の遺物もまとめて出土した。第Ⅲ次調査(1985年)で、古墳時代から奈良時代の住居跡が6軒検出され、弥生時代後期山中式から欠土式の土器が少量ではあるが出土している。第Ⅳ次調査(1986年)で、古墳時代後期の溝状遺構より須恵器がまとめて出土し、第Ⅴ次調査(同年)で、旧石器時代の尖頭器などが数点、第Ⅶ次調査で、室町時代の溝状遺構や土壇から山茶碗などが出土した。このように、各時代の遺構が次第に明らかになってきた。一方、近世の建物跡等も発見されている。この一帯は、『天明年間名古屋市中支配分図』や『尾府全図』を見ると、武家屋敷が建ち並んでいたようである。「豎三蔵通」の名は、沼洲越えとともに、尾張藩の御蔵を設けた南北筋に付けられたと言われる。延享3年(1746年)に、御蔵の南側に武家屋敷を取り壊して御普請方役所が建てられた。また、御普請方役所と天王社(州崎神社)との間に船奉行千賀邸が存った。

本遺跡の東側に隣接して、白川公園遺跡がある。この遺跡は、公園地内の遊水池建設工事の際(1984年)に新規発見され、古墳時代から江戸時代の遺物包含層が確認されている。仮称名古屋市美術館建設工事に伴う第Ⅰ次調査(1985年)で、近世以降の墓塚を約260基検出し、人骨が約180体分が発見された。当時、この一帯には寺院が密集していたが、調査区は、寺の配置関係から兼林寺の墓域であろうと推測されている。仮称生命科学館建設工事に伴う第Ⅱ次調査(1986年)で、近世以降の墓跡等と共に陶磁器が、北に向けて下がる地形の埋土中から古墳時代の遺物が多く出土した。

第1図 発掘調査の位置と周辺の遺跡



- 7-4 豊三蔵通遺跡
- 7-7 日出神社古墳
- 7-8 那古野山古墳
- 7-9 浅間神社古墳
- 7-11 岩井通貝塚
- 7-12 旅籠町遺跡
- 7-13 日置城跡
- 7-14 西脇町遺跡
- 7-16 松原遺跡
- 7-24 旧紫川遺跡
- 7-25 白川公園遺跡



第2図 発掘調査位置図



- |                       |                  |
|-----------------------|------------------|
| 1. 第Ⅰ次旧紫川遺跡調査箇所       | 4. 第Ⅰ次竪三蔵通遺跡調査箇所 |
| 2. 第Ⅱ次旧紫川遺跡調査箇所       | 5. 第Ⅱ次竪三蔵通遺跡調査箇所 |
| P. 178 } 第Ⅲ次旧紫川遺跡調査箇所 | 6. 第Ⅲ次竪三蔵通遺跡調査箇所 |
| P. 179 } 第Ⅳ次旧紫川遺跡調査箇所 | 7. 第Ⅳ次竪三蔵通遺跡調査箇所 |
| P. 180 } 第Ⅳ次旧紫川遺跡調査箇所 | 8. 第Ⅴ次竪三蔵通遺跡調査箇所 |
| P. 183 } 第Ⅳ次旧紫川遺跡調査箇所 | 9. 第Ⅵ次竪三蔵通遺跡調査箇所 |
| 3. 第Ⅴ次旧紫川遺跡調査箇所       |                  |

栄一丁目一帯は、名古屋城下町を継承発展し戦災復興計画により都市化が進んだ地域であったが、近年の市街地再開発に伴って、市街地に埋もれた遺跡の概要が次第に知られるようになったわけである。本遺跡に関しては、「紫川」が改修され戦前まで利用された経緯が、近世から近代に至る遺物や遺構によって実証された。古代であっても、本遺跡が小谷地形に位置するため、周辺の遺跡からの遺物の流入がかなりあったと考えられ、竪三蔵通遺跡の重要性が高まってきた。一方、今回の調査区においては、南東部に遺物が集中している。しかし、南側の台地では、大須一丁目一帯に遺跡の分布が確認されていない。大須二丁目で、築造時期が5世紀後半から6世紀初頭と推定される大須二子山古墳を始めとし、古墳が数基ある。さらに、松原一丁目に、縄文時代後期の岩井通貝塚などが分布するにすぎない。今回の調査結果から、大須一丁目一帯で、市街地に埋もれた集落跡が新発見される可能性が、いっそう高くなったと言えよう。

都市高速道路の完成や若宮大通の整備に伴って、周辺の市街地再開発がいっそう増加するものと思われる。開発に伴って、遺跡の概要が解明されるという現状は、心苦しいものの、縄文時代から中世の生活跡の新たな発見に期待せざるを得ない。

#### (参考文献)

- 旧紫川遺跡調査会 1984 『旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書(Ⅱ)』  
旧紫川遺跡調査会 1985 『旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書(Ⅲ)』  
名古屋市教育委員会 1985 『旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書(Ⅳ)』  
名古屋市教育委員会 1986 『旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書(Ⅴ)』  
名古屋市教育委員会 1984 『竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書』  
名古屋市教育委員会 1986 『第Ⅲ次竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書』  
名古屋市教育委員会 1986 『白川公園遺跡発掘調査概要報告書』

### 3. 調査の経過及び概要

調査区は、地表下約2mより包含層が堆積するため、事前にH鋼杭の打設と表土層の除去を終了させた、約12.5×13.5mの形状であり、遺物採集に際して4分割した。北東区を第1区、南東区を第2区、南西区を第3区、北西区を第4区と呼称する。

基本となる土層は、戦災ガラを含む表土層が約200cm、近世陶器等を含む灰褐色土層が約70cm、古墳時代から鎌倉時代の遺物を含む茶褐色土層及び黒褐色土層が約30cmであった。さらに、一部に堆積する黄褐色粗砂層から縄文時代後期の土器が出土し、青灰色砂シルト層の地山面に至る。黄褐色粗砂層は、主に調査区東中央部から南西部に走る流路に堆積するもので、縄文土器の他、古墳時代から鎌倉時代の遺物も若干含まれている。青灰色砂シルト層は、概ね調査区の北西方向に傾斜している。

本遺跡の位置する若宮大通地内は、小谷地形であり、遺物は周辺の遺跡から流入したものが大多数と考えられる。調査区では、地表下約200cmの面で、近世の生活が営まれたようで、遺構として井戸跡や土壇状遺構があった。茶褐色土層等の面で、柱穴等を確認することはできなかった。また、近世以前の遺構は、検出されなかった。

以下、調査日誌を略述して、調査の経過と概要を述べる。

6月30日 近現代の跡を検出し除去。近世陶器片を含む灰褐色土層が露呈する。発掘区中央北寄りに、井戸跡が確認される。

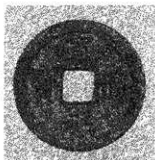
7月1日 発掘区の周囲に幅約50cmの試掘溝をめぐらし、土層を観察すると、灰褐色土及び茶褐色土が全域に、黒褐色土が概ね東側に堆積することが判明した。灰褐色土を掘り下げる段階で、発掘区中央西寄りに、灰褐色土を埋土とする自然地形のくぼみを確認する。

7月2日 茶褐色土を掘り下げる段階で、発掘区中央を北東から南西に走る自然地形の溝を確認する。この溝の概ね南東側に有機質の強い黒褐色土が認められ、北西側に至るにつれ有機質が弱く色調も茶褐色土に類似することが判明した。厚み約5cmの漆喰で円形に築る井戸跡を清掃すると、約1mの深さより木わくが発見された。

7月3日 黒褐色土を露呈させると、発掘区中央南東ほど黒褐色土が厚く堆積するため、その傾斜状況を平板測量する。井戸跡の北側に、短辺約50cm・長辺約120cmの

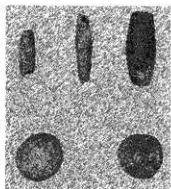
土壌を検出し、近世陶器が出土する。井戸跡の南東に、短辺約200cm・長辺約400cmの土壌状のくぼみが認められた。埋土は、灰褐色土と黒褐色土とが混り合うもので、近世陶器や奈良時代の須恵器が若干出土した。このくぼみは、精査に努めたが、遺構としての確証は得られなかった。

7月4日 黒褐色土を掘り下げると、有機質の強い黒褐色土が露呈する。発掘区を斜めに分割するかのように、南東部に黒褐色土が、北西部に青灰色砂シルトが堆積する状態となった。第1区で、青灰色砂シルトの上部面に、鉄分が浸透して堅い灰褐色土のバンド層が認められた。



▲灰褐色土層

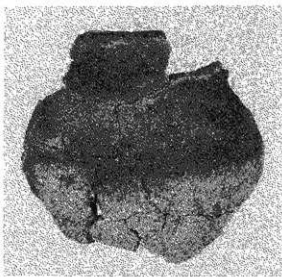
7月7・8日 第2・3区の黒褐色土を掘り下げる。第2区の北側部分でも、第1区と同様の鉄分が浸透する堅い灰褐色土バンド層が認められた。この層の上面で遺構の検出に努めたところ、この層の下より、黄褐色粗砂を埋土とする流路のような溝（中央溝と呼ぶ）が確認できた。遺構というより、むしろ自然地形で、発掘区中央東寄りから南西方向に走り、埋土より縄文土器が出土した。



▲茶褐色土層

7月9日 溝状の自然地形を掘り下げると、黄褐色粗砂層・灰褐色粗砂層・青灰色粗砂層や砂利層などが互層に堆積し、縄文土器がかなりの量出土する。

7月10日 第1・2区の青灰色砂シルト層を試掘したが、遺物は含まれていなかった。溝状の自然地形の底を精査すると、第1区で砂利層を埋土とするくぼみが検出された。このくぼみより、縄文時代後期と推測される、浅鉢型土器と石鏃などが出土した。浅鉢は、上唇部の表面が研磨されている。くぼみの底は、遺物



▲砂利層(1区)



を含まない黄褐色砂シルト層である。

7月11日 第2区で溝状の自然地形の肩部を精査すると、直径約1m、深さ約50cmの円形のくぼみが2つ確認された。埋土は灰色粗砂である。しかし、遺物はまったく含まれず、側面にあつては埋土と青灰色砂シルトとの境が判然とせず、遺構とすべきものでないと考えられる。

7月12日 発掘区の写真撮影。

7月14・15日 土層図の作成。

7月16日 発掘区の地形の写真撮影による実測業務。終了。

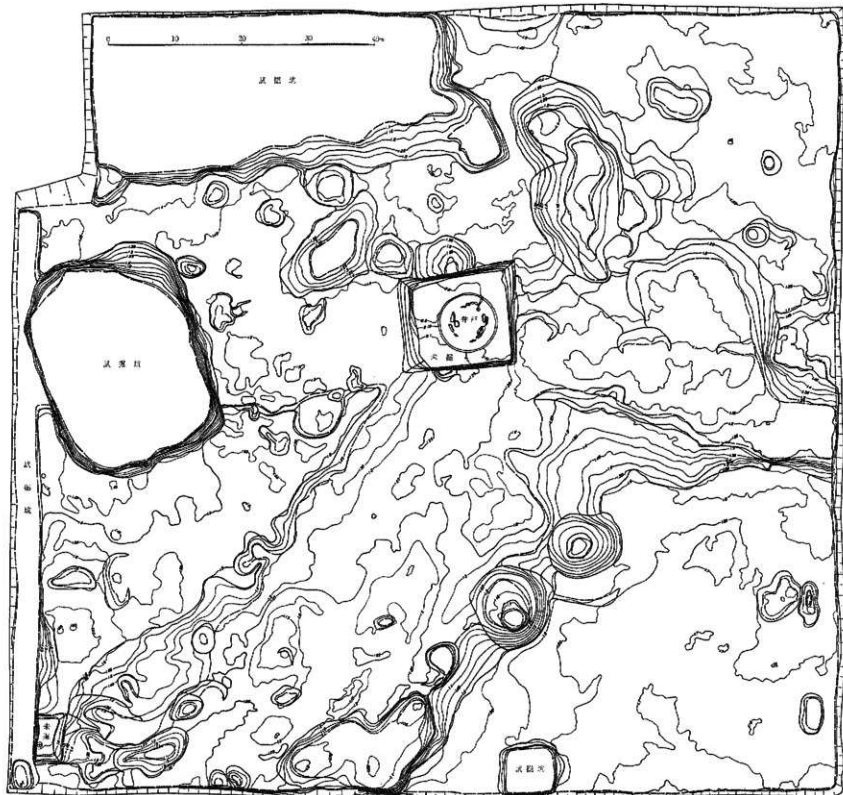
出土した遺物は、縄文時代から近世に至る、土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・陶磁器などの細片で、コンテナ箱に約15個分であった。縄文時代土器は、量からすれば、後期の称名寺式土器が多くある。弥生時代土器は、後期の欠山式土器が少量ある。古墳時代の土師器と須恵器は、前者に5世紀後半の神明式に類似する高坏などが少量あり、後者は量からすれば6世紀後半のものが多い。須恵器のほとんどが、奈良・平安時代のものである。山茶碗は、12世紀から13世紀代頃までのものが多い。

#### 4. おわりに

本遺跡の調査は、今回の調査を含めて第V次を数え、出土遺物に縄文時代早期から晩期、弥生時代後期から古墳時代、古代から中世、近世以降と各時代にわたるものがあり、数量及び種類とも豊富で貴重な資料を得ることができた。しかし、その出土状態は、ほとんどが「紫川」の河川敷ということで、生活跡との関連を知るものとなっていない。

「紫川」についても、絵図面に記載される内容と同じくして、堀川から東進して伸びる状況を伺い知ることができたものの、これまでの調査によって検出された石垣列の多くが、幕末以降近世に至るまで機能していたと考えられる。そのため、補修・改修が繰り返し行なわれたことも明らかで、各年代別の流路を正確に把握することが困難な状況にある。ただし第I次調査地点と、第IV次調査のP.181～P.183地点の成果

第3图 发掘区地形图



から、前者発見の石積と後者発見の石積による2つの河川があることは明らかになった。いずれも、河川の右岸部が検出されているため、その巾員については判明していない。また、P.181及びP.183地点で、河原石を複数積み上げた礎石が検出され、おそらく近世以降と思われる建物があつた。軟弱な土面に、建築しようとした際の工夫が感じられる。

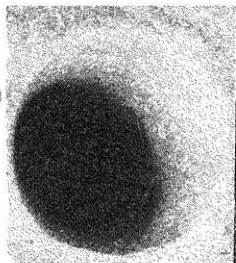
中世以前の様相については、本遺跡のみで述べる事がまったくない状況にある。ただし、弥生時代以前の遺物包含層の堆積範囲については、第Ⅰ次調査地点と、第Ⅳ次調査のP.181～P.183地点の北側部分と、さらに今回の調査地点の東側部分に集中していると思われる。縄文時代の遺物包含層（黒褐色土層）の堆積範囲についても、第Ⅰ次調査地点とP.181～P.183地点の北側部分に集中するものと思われる。江戸時代に、「紫川」の水路となった小谷地形に沿って、古代の生活が営まれたことが容易に想像される。本遺跡の近辺には、縄文晩期の岩井通貝塚、弥生時代の西脇遺跡・松原遺跡、古墳時代の竪三蔵通遺跡・旅籠町遺跡・松原遺跡・日出神社古墳・那古野山古墳・浅間社古墳・火須二子山古墳、古代から中世の竪三蔵遺跡・旅籠町遺跡・日置城跡・松原遺跡等があり、台地縁に沿って多くの遺跡が点在している。これら遺跡の各時代での立地地形を、市街地化された現在の地形から推定することはかなり困難であるものの、復元することも、本遺跡を解明する手掛りとなり得ると思われる。

当地周辺の発掘調査が増加する現在、課題が多くあると言える。





▲ 発掘区全景 (西より見る)



▲ 井戸跡

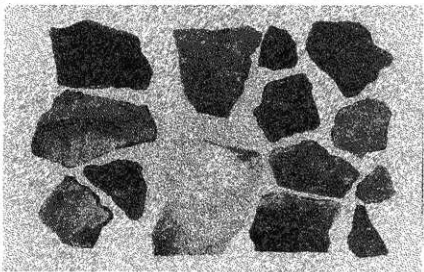
▼ 発掘風景



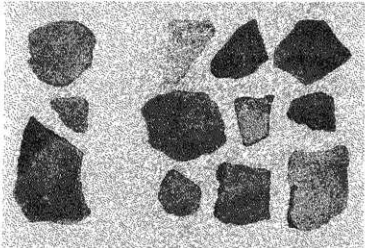




◀ 中央溝  
青灰色砂層  
(3区)



◀ 青灰色砂層  
(3区)



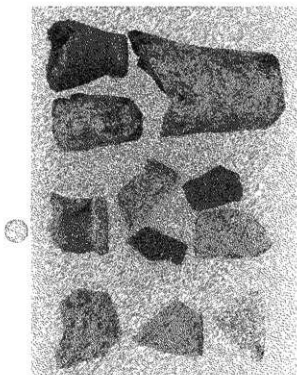
▲ 青灰色砂層 (左: 2区 右: 3区)



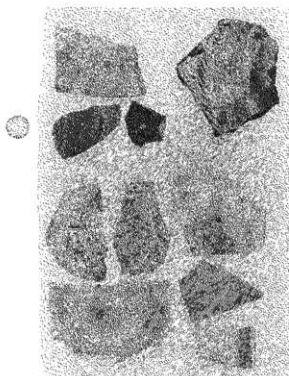
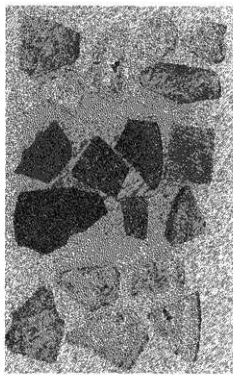
▲ 淡褐色砂層 (2区)



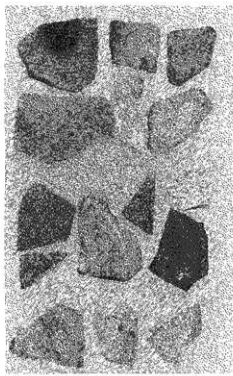




◀▶  
黑褐色土層 (1区)



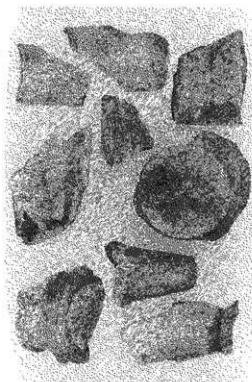
◀▶  
黑褐色土層 (2区)



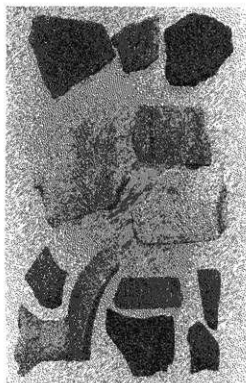




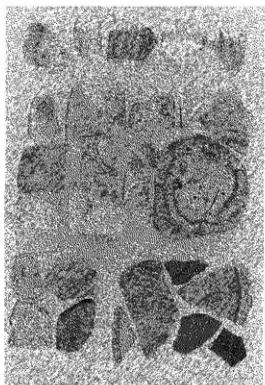
◀▶  
黑褐色土層 (3区)



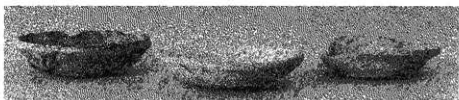
◀▶  
黑褐色土層 (4区)



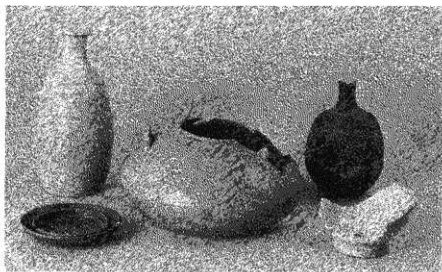




茶褐色土層



▲ 茶褐色土層



灰褐色砂質土層

旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書

(VI)

(名古屋市中区大須・丁目・旧紫川遺跡第V次調査)

1987年3月31日 印刷・発行

編集 名古屋市教育委員会

名古屋市中区二の丸三丁目1番1号

発行 同上

印刷 東海プリント社